F.GMES（Fukui Global Medical Education Seminar）

医学部遠隔授業システム F.MOCE（エフ・モス）を用いて、海外で活躍する日本人医師のお話を伺うセミナー >>>

医学部附属教育支援センターでは、国際センターとのコラボ企画として、海外で臨床医として活躍する日本人医師の方に、自身の体験談やキャリアなどについての講演動画を作成していただき、将来USMLE受験や臨床留学を考えている医学科生に向けて、F.MOCEでオンデマンド配信し、さらに視聴した学生とその医師の方々とで「オンライン質問会」をライブで開催しています。講演動画は、今後アーカイブ化することを予定しています。

米国テキサス州ヒューストンより F.GMESに参加して

テキサス州立大学
兒子（にご） 真之（まさゆき）
Assistant Professor
Division of Infectious Diseases, Department of Internal Medicine
The University of Texas Health Science Center at Houston
McGovern Medical School

SARS-CoV-2（新型コロナウイルス）が全世界で猛威を振るっている。それは、一般社会・医療現場だけではなく、学生教育の現場においても大きな影響をもたらした。

私は2005年に福井大学医学部を卒業し、その後米国感染症専門医取得後、テキサス州立大学ヒューストン校にて感染症専門医として働いている。コロナが出現後、私の日常は病院感染対策・患者の治療に明け暮れる日々ではあるが、その中、福井大学よりF.GMES（Fukui Global Medical Education Seminar）の遠隔セミナーの一環で米国での診療現状と臨床留学に至った経緯を講演するという依頼をいただいた。

私の在学中に、大学でこのような講演を聞く機会はあっただろうか？大学がコロナで広がった遠隔授業を逆手にとり、このような機会を医学部生に提供していることに非常に大きな喜びを感じた。私の他に３名の海外で活躍されている福井に縁のある医師が、それぞれの経験をもとに講義を録画し学生に公開した。医学部生だけでなく研修医や多くの方にも視ていただきたいと思う。実際、私も他の先生の講演を視聴し感銘を受け、次への活力となった。

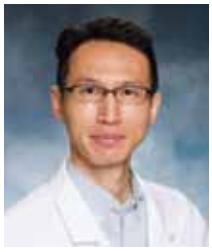
私はすべての学生に『臨床』留学を勧めるわけではない。あくまで、自分の将来の目標に必要であれば、すれば良いと考えている。米国や海外の医師・医療制度がすべて良いわけではない。ただ、臨床でも研究でもキャリアのなかで、特に早い時期に外（海外）を経験すること、他流試合することは貴重だと思う。それは、私のキャリアを形成したような大切な出会いにも繋がる。私は日本で５年間医師として働いた後に渡米した。日本人とその医療の素晴らしさも、米国で医師として働く中で実感している。その一方で、海外を知ることで日本の医療の弱点にも気づき、日本人の海外での存在の薄さも感じている。

コロナが全世界に短期間で広がったように、日本と世界との距離は年々縮まっている。福井大学の学生の皆さんには、今どこにいるかは関係なく、『自分』が探せば、すぐ手の届くところに学びの機会と外（海外）はあり、そういったチャンスを掴むのは自分次第なのだということを実感してほしい。また、私達の講演がやる気のある学生の一助になれれば、それに勝る喜びはない。

最後に、このような機会をいただいた医学部附属教育支援センター長の安倍教授と国際課の増田様への謝辞でこの投稿を締めさせていただこうと思う。

オンライン質問会の様子

ラトガース大学 – 米国ニュージャージー州、福井大学協定校より



ラトガース大学
池上 博久（いけがみ ひろひさ）
Assistant Professor of Surgery
Surgical Director, Cardiac Transplant and Ventricular Assist Device (VAD) Program
Division of cardiothoracic Surgery
Department of Surgery
Rutgers, Robert Wood Johnson Medical School
Robert Wood Johnson University Hospital

この度は、福井大学医学部広報誌「くずりゅう」への寄稿の機会を頂き誠にありがとうございます。現在私は、福井大学と協定校の関係にあるアメリカ・ニュージャージー州のニューブランズウィックという町にあるラトガース大学（Rutgers University）医学部（Robert Wood Johnson Medical School）所属の心臓外科医をしています。私は2004年に滋賀医科大学を卒業し、母校の附属病院で２年間の初期臨床研修及び２年間の心臓血管外科研修を行いました。その後卒後５年目にあたる2008年より、途中の一時帰国を挟みますがジョージア州アトランタのエモリー大学（Emory University）、イリノイ州シカゴのノースウェスタン大学（Northwestern University）、ニューヨーク州マンハッタンにあるコロンビア大学（Columbia University）で心臓外科の臨床研修をさせて頂く機会に恵まれ、その後2017年より現職に至ります。

さて、ラトガース大学は全米で８番目に古い歴史を持つ1766年創立の名門州立大学です。幕末の1867年、ラトガース大学への初めての日本人留学生であった越前福井藩士日下部太郎氏の縁もあり、福井市とここニューブランズウィック市とは1982年より正式な姉妹都市となり活発な交流が続けられています。福井大学とラトガース大学は1981年に結ばれた旧協定があり姉妹校の関係にありましたが、2017年に更なる交流促進のために協定の再締結が行われました。これを機に、2019年より福井大学医学生の本格的なラトガース大学における医学臨床実習留学が始まりました。

2019年春、福井大学の医学生２名が1ヶ月間のラトガース大学医学臨床実習留学に来られました。そのうち２週間は家庭医療科のLin教授のもとでアメリカの総合内科医療を学び、残りの２週間は私のもとでアメリカの心臓外科医療を学んで頂きました。アメリカのプライマリーケア医療の現場と、高度に専門化された心臓外科医療という正に対極に位置するとも言える両医療を体験して頂き日米の医療の違い、またアメリカ医療の良いところや悪いところなども肌で感じて頂けたように思います。

あらゆる分野で国際交流が進んで久しい現在ですが、医療の分野でも古くから国際交流が行われてきました。その大半は研究を主とする国際交流や留学ですが、中には私のように臨床医療目的の留学も以前から散見されます。近年はこの臨床留学者の数が増加傾向にあり、更にその場所・分野の多様性も増してきているように感じます。臨床留学を志す人は医学生の僅か数%であり、いざ興味を持ってもその数が少ないので臨床留学経験者から直接話を聞くことは容易ではありません。当然臨床留学に関する本当の生の声を聞きたければ、既に臨床留学経験のある国内外の先生の元へ自ら足を運ぶのがベストですが、時間・費用・そして感染症の蔓延などなど様々な理由で困難なこともあります。特に2020年は新型コロナウイルス・COVID-19の世界的流行によりあらゆる分野で世界的にも国内的にも人の移動や交流が制限されることとなりました。それに伴い2020年度の福井大学医学生のラトガース大学臨床実習留学も中止となりました。

このような中、福井大学医学部附属教育支援センターと福井大学国際課の御尽力により医学部遠隔授業システム（F.MOCE）を利用したオンライン遠隔講義が私を含む数人の現役海外臨床医療従事者によってFukui Global Medical Education Seminar（F.GMES）という形で実現しました。今回の遠隔講義とそれに続くリアルタイムでの遠隔質問会は、海外の医療や臨床留学に興味のある医学生の好奇心、探究心、向学心などを大いに刺激することになったのではないかと思います。臨床留学というのは、今後医学生の皆さんが将来の臨床研修先や専攻科を決められる際の進路の選択肢の一つに過ぎません。逆にいうと将来の選択肢の一つであることは確かです。このF. GMESの企画が、参加された福井大学の医学生の皆さんの将来の可能性を広げること

に繋がれば幸いです。またその中に臨床留学を実際にされる方が現れ、ゆくゆくはそれが日本の或いは世界の患者さんへの医療や健康に貢献されゆくことを切に願います。この度は、福井大学医学部附属教育支援センター長の安倍教授と福井大学国際課の増田様にはこのような貴重な機会を与えて頂き深く御礼申し上げます。

ラトガース大学医学部附属病院（Robert Wood Johnson University Hospital）の正面玄関付近

ニューブランズウィックの町の中心にある姉妹都市の方向と距離を示す看板

●参加した学生からの感想

医学科４年生　大久保（おおくぼ） 甲斐（かい）

この一年、新型コロナウイルス感染症の流行で社会が様変わりしました。マスクは衣服と同じく生活必需品となり、観光業やその周辺産業はオリンピック特需から一転、苦境に立たされています。そんな普通が普通でなくなるという事態は、医学生の生活でも起こりつつあります。これまでの一般的医学生は大学に入学したら部活動に所属し、運動部であれば西医体や東医体で結果を残すことを目標に部活動に励み、勉強は進級できる程度になんとか単位を取り、国試前は猛勉強して逆転合格し、卒後は先輩のいる大学の医局に入局するというのが多くの地方医学生のキャリアパスであったと思います。しかし、昨年は新型コロナウイルスの影響で部活動や新歓が停止し、新入生の大半が部に所属できなかったため、医学部に入ったら部に所属するという普通がなくなりました。また、医学界においても遠隔医療やAI診療などの新技術の台頭により能力のない医師が淘汰されると予想され、受験や部活に試験といった敷かれたレールを進んでいけば将来安泰だという幻想も消えつつあります。

そんなこれからの普通じゃない時代を生き抜く上でヒントを与えてくれたのがF.GMESです。F.GMESに登壇された先生方はかつて、上記のいわゆる普通の医学生としての生活を送りながらも、何らかのきかっけで海外臨床留学という道を知り、海外で働くという普通ではない世界に飛び込み、生き抜いてきました。米国の病院は日本と異なり買い手市場であり、世界中から集まる医学生や医師との競争に勝たなければいけません。F.GMESの動画や質問会では、海外の病院で採用されるために各々の先生方がとった方法を詳細に聞くことができました。また、留学のメリットデメリットについても詳しく聞くことができ、実際に留学をしたからこそわかる話も多く聞くことができました。医師として働くなら米国、患者としてなら日本が良い、という言葉もその一つですが、説明を聞くと非常に納得のいくもので、強く心に残っています。

F.GMESで学んだことは、単なる留学の方法だけではありません。どの先生も自身の適性や興味など深い内省を基に進むべき道を決め、そのために必要な努力を合理的に考え実践し、普通ではない世界を生き抜いてきました。注目すべきは、どの先生も最初は部活動に精を出す普通の医学生だった点です。自分には関係のない世界だと思っている学生にこそ視聴をお勧めします。

医学科３年生　三木（みき） 静那（せりな）

医学部に入学することは多くの医学部生にとって、卒後の膨大な時間を職業・医師を中心として生きていくことを意味します。私もそのつもりで入学し、将来について考えるといえば何科の医師になるか、どんな医師になりたいかということでした。しかしそれは固定観念であり、医学部生の卒後の進路は想像するより遥かに多様であること、また自分が生きていく上で1番大切なことを見極め、それに合ったキャリアプランを構築することの必要性を認識させてくださったのが今回のF-GMES事業でした。

とにかく旅が好きな私は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、旅行をキャンセルせざるを得なくなったことで閉塞的な気持ちになっていました。そんな中、海外で働いている先生方のお話が伺えると聞き、リモート海外旅行のような気持ちで参加させていただくことにしました。アメリカにおける医師の役割や日本とのシステムの違いなど海外で医師として働くための基本的な順序など書ききれないほど多くのことを動画の中で教えてくださいました。その中でもハードなタイムスケジュールを過ごす一医学生であったときに海外で医師として働く決意をしたきっかけや、そこからの行動指針の決め方、実際に起こした行動を詳細に教えてくださり、とても参考になりました。

医学生にとって最も重要なことは医学知識を定着させること、医師として働くようになったときに最先端の医療技術・知識を吸収できるようにしておくことだと私は信じています。そのために今日の前にある課題やテストに一生懸命に取り組む毎日です。こう言うと聞こえはいいですが、目の前のものに囚われ言い訳にして、先に挙げた医師としてやりたいことをするために学生のうちにすべきことは何か、そもそもそれは本当に今の自分にとってやりたいことで変更はないのか、もっと異なる選択肢があるはずなのに見て見ぬふりをしているのではないか。このような自分の状況をまるで知っているかのように、先生方はオンデマンドの講義や質問会で指摘してくださいました。

質問会が終了し自分の弱みを再認識したことで一度、上記の将来の目標とする医師像を保留し、「自分にとって1番幸せであること、譲れない条件」を考える時間を設けることにしました。第一回の質問会から3ヶ月が過ぎようとしていますが、未だに卒後何がしたいかは見えてきていません。しかしそれまでのように一度決めたことに固執するのではなく、常に新しい価値観で自分の人生を見直すことができるようになった事はキャンセルした海外旅行では得られなかったであろう大きな転機となりました。